

2022年度 入学試験問題（第1回）

国語

(50分 満点：100点)

注 意

- 1. 指示があるまで開いてはいけません。
- 2. 答えはすべて解答用紙に記入下さい。
- 3. 用具類の貸し借りは禁止します。
- 4. 指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 5. 質問があればだまって手をあげて監督者を呼び下さい。
- 6. 問題用紙も解答用紙といっしょに出して下さい。問題用紙の余白は下書きとか計算などに利用してもかまいません。
- 7. 一般入試（5科目型，英語型）の受験生はすべての問題に解答下さい。帰国生入試の受験生は指定された問題のみ解答下さい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 「全員解答すること。」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの問題に答える場合、句読点・記号は全て一字とする)

雨音は父・広希を交通事故で亡くして間もない中学生。帆波は父親の婚約者である。国吉は雨音の実母だが、事情があつて雨音が産まれてすぐに家を出てしまった。そのため雨音は国吉が実母であるという実感が薄い。三人は今、雨音が父親と二人で暮らしていた場所と一緒に生活している。これは雨音の誕生日に、帆波の策略に乗せられ、帆波と一緒に国吉の働くレストランを訪れた場面である。

「……そういえば、誕生日に帆波さんと一緒に初めてだね」

クリスマスも、お正月も帆波さんはうちに來たし、パパや帆波さんのお誕生日は三人でレストランに行つた。なのに、あたしの誕生日だけはパパとふたりだった。帆波さんがうちに來るようになった最初の誕生日は、帆波さんが一緒にいないことにほっとしたけど、翌年はちょっと変な気がした。それで「帆波さんは？」って聞いたたら、「明日來るって言つてたよ」ってパパはなんでもないように言つた。

「なんでいつも來てくれなかったの？」

「お誕生日だからね、雨音ちゃんの」

あたしが（ 1 ）と、帆波さんは笑みを浮かべてグラスを口につけた。

しばらく窓の外に目をやっていると、ウェイターがテーブルの前に來た。

「プロッコリーとチーズのサラダとほうれん草のココットでございます。ただいまメインをお持ちいたします」

シンプルな白い平皿にちょこんと盛りつけられたサラダと、ぽってりとした丸い器にとろけそうなたまごのつたココットが、テーブルに置かれた。

「今日はね、コース料理みたいな出し方にはしないでくださいってお願いしたの。お誕生日会ってテーブルの上、にぎやかでしょ」
さつきウェイターさんをお願いしていたのはそれか。

「別に、いいのに」

ここはレストランでうちじゃないんだから……。

「ビーフシチューの煮込みハンバーグでございます」

そういつて白い深皿が正面に置かれた。

① えっ？

この匂い……。

「わ、おいしそう」

帆波さんに促されるようにして、あたしはソーススプーンをそつとハンバーグにあてた。

口に入れると、じゅわつと舌の上に肉汁が広がる。ビーフシチューのコクの深いソースと鼻から抜けるやさしい香り。

同じだ。

あたしの誕生日は、いつも家でパパとふたりでお祝いをした。

ごちそうは小さいときから毎年決まつてビーフシチューの煮込みハンバーグ。パパおすめのレストランからテイクアウトしてきてくれるハンバーグで、あたしの大好物。それにサラダとかココットやなにか。ケーキは苺とブルーベリーののつたホールのショートケーキが定番。

「どうして」

あたしがつぶやくと、帆波さんは目じりを下げた。

「広希さん、毎年ここのお料理をテイクアウトしてたんだね」

あたしは皿のなかのハンバーグをじつと見つめた。

② 「なんで」

声が小さく震えた。

「お誕生日は、お母さんの料理を食べさせてあげたかったんだよ」

「じゃあ、国吉さんもずっと知つてて」

ううん、と帆波さんは（ 2 ）た。

「オーナーが、毎年協力してくれていたんだつて」

そういえば、オーナーは国吉さんの事情を知つているとか言つてたっけ……。

「雨音ちゃんが十二歳のお誕生日のまえにね、わたし、広希さんにこのことを聞いたの。でも最近になつて思うんだけど、国吉さんは毎年、広希さんが雨音ちゃんの誕生日に料理をテイクアウトしていたことに、気づいていたんじゃないかな」

③ 「どうして？」

「だって、国吉さん、家ではほとんど洋食作らないでしょ。それって、そういうことなんじゃないかな」
膝の上でナプキンをぎゅっと握った。入口に近いテーブルの女の人たちから楽し気な笑い声があがった。
「温かいうちに食べよ」

帆波さんはソーススプーンを動かして、ビーフシチューにハンバーグを絡めるようにして口に運んだ。
「雨音ちゃんは、ずつとずつと小さい頃から、お母さんにもお誕生日をお祝いしてもらっていたんだよ」
静かにやさしく響く帆波さんの声に目頭が熱くなって、あたしはあわててハンバーグを頬張った。
この味。

そう、この味だ。

④ パパは毎年、「やつぱりこのハンバーグが一番おいしいな」って言って、あたしが食べるのを嬉しそうに見てた。
⑤ ばかみたい。言ってくれなきやわからないよ。それじゃあパパの自己満足じゃん。いつもどうでもいいことばかり、ぺらぺらしゃべってたのに。

ぼろぼろと涙がこぼれた。あわてて手で拭うと帆波さんがハンカチをあたしの前に置いた。それを顔に当てると、喉の奥がひくひくして、涙腺のタガが外れた。

パパは自分がこんなに早く死んじゃうなんて思っていなかったんだらうけど。帆波さんが話してくれなかったら、あたしは一生パパのことも国吉さんのことも、ふたりのことも、なにも知らなかった。
パパがいなくなって、初めてこんなに泣いた……。

ハンカチを握ったまま顔をあげると、帆波さんの笑顔があった。

「広希さんね、去年の誕生日は誘ってくれたの」

「じゃあなんで来てくれなかったの？もしかしたら帆波さん、気をつかって」

「それもあるけど、ちょっと悔しかったものもあるかな」

「悔しかった？」

だって、と帆波さんは（ 3 ）た。

「雨音ちゃんが十八歳の誕生日までは、母親の手料理でお祝いをしたんだけど、いいかなって」

⑤ ……パパ、相変わらずダメだね」

鼻をすすんやりながら言うと、帆波さんはくすくす笑って目じりを下げた。

「わたし、国吉さんにやきもち焼いてたんだよ」

そう言って「本当においしい」と、シチューを口に入れた。

⑥ 嬉しいのか悲しいのかわからなくて、少し胸が苦しかったけど、あたしたちはテーブルに並んだ料理を完食した。
ほどなくすると、ウェイターが皿を下げに来了。

「お飲物をご用意いたしますが、いかがいたしましょう」

「あたしは紅茶をお願いします」

「デカフェはありますか？」

帆波さんはカフェインレスのコーヒーを頼んだ。

「ご用意いたします」

まわりを見ると、いつの間にかテーブルは満席になっていた。

ロウソクの灯りがゆらゆら天井にうつっているのをぼーっと眺めていると、白髪のウェイターが飲みものを運んできた。

「お口に合いましたでしょうか」

「あ、はい」

「どれもおいしかったです。とくに煮込みハンバーグ」

短く応えるあたしにわかって、帆波さんが応えた。

「ありがとうございます。いつかこちらで召し上がっていただきたいと思っていましたので、ひとつ夢がかないました」

「オーナーさんですか？」

帆波さんが言うと、その人はゆっくり首肯した。「パパの共犯者」とあたしがつぶやくと、⑦ オーナーは目元に深いしわを作った。

「九年前から、この日におふたり分の料理をご予約頂いております」

ってことはあたしが五歳の誕生日からだ。ああ、おばあちゃんが亡くなってから。

「デザートをお持ちしました」

オーナーのうしろから国吉さんがあらわれた。コックコート姿が似合っている。というより馴染んでいる。

「どうぞゆつくりなさってください」オーナーがさを見ると、国吉さんは手にしていたケーキをテーブルに置いた。

苺とブルーベリーがたっぷりデコレーションされたショートケーキ。その皿の上にチョコペンできれいなメッセージが書いてあった。

Happy Birthday, Amanesani

「帆波さんから予約の連絡を頂いたので。わたしからのお祝いです」

国吉さんは会釈をすると、厨房のほうへからだを向けた。

「ありがとうございます」

背中に向かって言うと、国吉さんは足を止めて振り返り、「お誕生日おめでとうございます」とささやくように言って、帆波さんに小さく会釈をした。

「帆波さん」

「ん？」

「これ、持って帰ってもいいかな」

あたしが言うと、^⑧帆波さんはふっと笑った。

「そうだね、そうしょ」

頬が火照るのを感じながらこくんとうなずいて、あたしは紅茶に砂糖を入れた。

「国吉さんが帰ってきたら三人で食べようね」

「べつにそういう意味で帰るって言ったんじゃないよ。いまはおなかいっぱいだから」

「雨音ちゃんは、国吉さんのことになると素直じゃないんだから」

「そんなことないよ」

あるある、と笑いながら帆波さんはカップをもちあげた。

「一緒に食べよう。三人で」

窓の外に目を向けて、あたしは「うん」と短く応えた。

(二〇二一年 ひとつみく『あしたの幸福』より 問題のため一部文章を改めた)

問一 空欄1～3に入れるのに適切な慣用句をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。空欄に入れるときに適切な形に直すものもあります。

- | | | |
|----------|----------|--------|
| ア かぶりを振る | イ 首を傾げる | ウ 膝を打つ |
| エ 肩をすくめる | オ 指をくわえる | カ 顎を出す |

問二 傍線①とあるが、その内容として最も適切なものを次から選び記号で答えなさい。

ア 予想に反してとてもおいしそうな匂いがしていることに、大きな驚きを感じている。

イ 帆波がこんなにセンスの良い料理を出すお店を知っていたことを意外に感じ、感心している。

ウ ビーフシチューの煮込みハンバーグと言われたが、とてもそれらしい匂いとは思われず、不審に感じている。

エ 誕生日に家で食べていた Beef シチューと同じ匂いだと思い、そのことに戸惑いを感じている。

問三 傍線②③で雨音が疑問に思っている内容として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 家ではほとんど洋食を作らない国吉が、こんなにおいしそうな匂いの Beef シチューの煮込みハンバーグを作れる理由。

イ 雨音の誕生日に広希が自分の料理をテイクアウトしていることを、国吉は気づいていたのではないかと帆波が言った理由。

ウ 雨音の誕生日に家に来なかった帆波が、国吉の作った料理を広希がテイクアウトしていたことを知っていた理由。

エ 広希が雨音の誕生日に毎年この店の Beef シチューの煮込みハンバーグをテイクアウトしていた理由。

問四 傍線④の内容を詳しく述べたものとして最も適切なものを記号で選びなさい。

ア パパが言ってくれなかったとはいえ、食べていたものがお母さんの作ったものであることにも気づかないあたしはばかみただい。

イ パパの心遣いに気づかずに毎日を過ごしていたし、言われるまでお母さんの心遣いにも気づかなかったあたしはばかみただい。

ウ 娘の気持ちも考えずに、母親の手作りの料理を食べさせて自分だけ満足していたパパはばかみただい。

エ どうでもいいことはべらべらしゃべるのに、肝心なことを教えるのを忘れるなんて、パパはばかみただい。

問五 傍線⑤とあるが、雨音が広希を「ダメだ」と判断したところを次のように説明するとき、空欄に入れるのに適切な表現を文中から十四字で抜き出し、初めの五字を答えなさい。

() という言い方をしたら、帆波がやきもちを焼くことにも気づかないところ。

問六 傍線⑥とあるが、雨音が嬉しく思ったことは何か。そのことを含む帆波の会話文を探し、初めの七字を答えなさい。(この問題に關しては、カギカッコは字数に含めません)

問七 傍線⑦とあるが、このときのオーナーの説明として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 善意でしたことなのに犯罪者呼ばわりされて不本意に感じ、少しだけ怒りを覚えている。
- イ 九年前のことを思い出して、広希の思いが雨音に伝わったことを天国の広希に届けようと念じている。
- ウ 広希の「共犯者」は自分だけではなく、帆波や国吉など、雨音を愛しく思う者すべてであったことに安堵している。
- エ 自分が広希の共犯者であることを認め、ようやくこの日が来たことを感慨深く思っている。

問八 傍線⑧の帆波の説明として適切なものを記号で選びなさい。

- ア おなかいっぱいでもケーキは食べたい雨音の子供っぽさを愉快に感じている。
- イ 自分の気持ちを素直に表現できない雨音をほえましく思っている。
- ウ 雨音に気を遣わせてしまった自分の大人げなさを恥ずかしく感じている。
- エ 三人で食べたいという雨音の優しさに触れ、嫉妬していた自分を反省している。

二

【問一～問九は全員解答すること。問十・問十一は5科目型・英語型の受験生のみ解答すること。】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出し、論述の問題に答える場合、句読点・記号は全て一字とする)

(筆者はここより前の文章で、大学の教育「改革」について述べている)

「コンテンツ」という言葉があります。音楽や映画といったエンタテインメント表現を指して使われることが多い言葉ですが、書物や放送番組、インターネットで見聞きすることができるさまざまな情報も指しますし、最近では大学の講義でさえ「コンテンツ」と呼ばれることが少なくありません。大雑把に言えば、「情報のひとまとまり」くらいの意味で広く使われている言葉です。

コンテンツという言葉が日本語に定着したのはさほど古いことではありません。新聞^{しんぶん}「^アキジデータベースなどで調べてみると、「コンテンツ」は^①90年代なかば頃に日本語の空間の中に急浮上してきた言葉だとわかります。それまでの「作品」や「楽曲」、「番組内容」といった言葉をひとまとめに塗り替えるように「コンテンツ」という言葉は流布しました。

言葉の変化とは、単に「同じものを違う言葉で指すようになった」ことではありません。一つの、あるいは複数の言葉が別の言葉にとつかわれるとき、その「ハイケイ」には社会の「ものの見方」の変化が横たわっています。言葉の変化は社会の変化です。

コンテンツという言葉の浮上は、^②社会における文化や知識をとらえる枠組みの変化を示しています。それをもたらした要因の一つはインターネットの社会への普及でしょう。1995年はウィンドウズ95が発売され、パソコンからのネット接続が容易になった年です。インターネットは異なった種類の多様な表現や知識をデジタルデータという共通の状態に還元することで、情報の流通を著しく便利にしました。かつては別々のメディアによって支えられ、各々異なるかたちでわれわれの思考や感性を形作っていたさまざまな知識や文化表現は、90年代なかばを境として(1)のかたちで一括して扱われ、消費される傾向が進んでいくことになります。

「コンテンツ」という概念は、知識や表現の質的な違いよりも、それが「ひとかたまり」の情報として^③「ドウトウ」に扱えることを強調します。書物と放送番組が同じく「コンテンツ」であると名指されるようになると、それを評価する観点もまた似通ってきます。かつては、書物とテレビ番組は別の(2)、別の世界、別の価値基準に属するものでした。テレビ番組であればそれは速報性によって評価され、書物であればそれが人間の知性にどのように深い影響を与えるかにより評価されました。

しかし「コンテンツ」として同一のスマートフォンで視聴される対象になれば、その区別は融解していきます。「面白いか」「泣けるか」「笑えるか」。あるいは送り手にとっては、そのコンテンツがどれだけ「売れるか」。異なるメディアに隔てられ、異なる基準により評価されていた知識や表現は、今や横並びに測られるようになりました。

かつては、知識とはそれとの長い格闘の末に身につけるものでした。それが「コンテンツ」と呼ばれるようになってから、教育のあり方も変化したように感じます。何かのために必要な知識は、どこかに「コンテンツ」として存在しており、必要ならそれを見つけて「アクセス」しさえすればいい、という感覚が、学生や社会に浸透したように感じます。

先に触れた、「カリキュラム通りに学生をしつかり勉強させる」ことを目指した大学「改革」のハイウェイにあった考え方は、私の考えでは、知識や能力を「コンテンツ」としてとらえる考え方です。学費を払った分に見合うだけの知識や能力が得られる場として、つまり、「知」を商品のように取引するような場へと大学は変化させられてきました。

しかし、大学教育は「コンテンツをインストールすることとは本質的に異なります。^エ ヒニクなことに、コロナ禍によって大学に通えなくなり、^④「オンライン授業はうんざりだ」「早く大学を再開してくれ」と声をあげる学生たちこそが、そのことに気づきつつあるのかもしれません。

教育内容Ⅱ（ 3 ）が、オンライン授業のかたちで学生に伝達されている現在の大学の状況は、いわば（政府が、あるいは社会が理想とした）「勉強に純化された大学」です。授業と授業の間の移動時間や、友人との雑談や、サークル活動などといった「勉強と直接関係ない」要素をすべて排除した、純化された「知識コンテンツのインストール」に多くの人々が不満を漏らしている。この事実は、勉強以外の無駄なことがむしろ大学の本質であったことを示しているのではないのでしょうか。

いえ、もっと強く言いましょう。^⑤「大学は勉強するところではない」のです。

大学とは「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」（教育基本法第7条）と定められている制度です。「 4 」というところがポイントです。大学とは「まだ存在しない知」を生み出すことこそがその存在根拠なのです。

つまり大学とは、知識を商品のように学生に売るところではありません。また、知識を持った「人材」を育成して企業に送り出すためのところでもない。そうではなく、大学とは、一人一人の学生の知的成長を促すための場所や機会を提供することで、社会にとって必要な知を維持し、そこから新しい知を生産するための場です。

それはハードディスクにソフトウェアをインストールすることよりも、公園で子供たちが ^⑥創□工□して遊んでいる状況に似ています。（教員や図書館は「ジャングルジム」のような ^オユウグに似ています。その「使い方」に定まった決まりはありません）。「知」とはデジタルデータではなく、身体と感情を持った人間一人一人が身につけ、実践し、対話し、^⑦□□□□する中でしか「役立たない」。大学とはそのために用意された場です。新型コロナウイルスが社会にもたらした「良い影響」がもしあったとするならば、ただオンラインで勉強だけすることが「大学の学び」ではない、ということに人々が気づいたことではないでしょうか。

【^⑧「コロナ禍がわれわれに教えたことは、このような経験したことのない難局に対するために必要な知とは、すでに誰かによって形作られパッケージされている「コンテンツ」ではありえない、という簡明な事実です。われわれはメディアで発言する専門家の意見の「食い違い」を日常的に目にしています。ある専門家は「PCR検査を拡大すべきだ」と主張し、別の専門家は「無闇な検査は控えるべきだ」と言う。あちらの専門家は「いち早く都市をロックダウンすべきだ」と言い、こちらの専門家は「経済への悪影響を考えるべきだ」と言う。

われわれはこのコロナ禍を解決してくれる解決策がどこにあるはずだ、と信じた。しかしそんなものは「まだ」どこにもない。コロナ禍を乗り越える知見はコンテンツとしては「まだ」存在していないのです。それは身銭を切って必死に考え、調査し、研究している「誰か」がこれから生み出す「かもしれない」ものです。それを担うのが「知」の仕事であり、大学の仕事なのです。コロナ禍に限られません。何であれ「問題を解決すること」の確かな道筋は、どこかの誰かが出来合いの答えとして示してくれるわけではありません。それは最終的には、自分の知性をもとに、自分の責任と判断で、自分自身で選び取っていくしかないのです。】

（二〇二〇年 増田聡『大学の学び』とは何か 『人生すべてがコンテンツ』を越えて』より 内田樹編『ポストコロナを生きるきみたちへ』所収 問題のため一部文章を改めた）

問一 傍線①とあるが、それをもたらしした要因の一つを十四字で述べた部分を文中から探し、初めの五字を抜き出さない。

問二 空欄1～3に入れるのに適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。同じ記号は一度しか使えません。

- | | | | | | |
|---|---------|---|---------|---|------|
| ア | インストール | イ | デジタルデータ | ウ | メディア |
| エ | インターネット | オ | コンテンツ | | |

問三 傍線②とあるが、社会における知識の捉え方について、どのようなものからどのようなものへと変化したかを述べた段落を探し、初めの五字を答えなさい。

問四 傍線③とあるが、その観点を具体的に述べた一続きの二文を探し、初めの五字を答えなさい。

問五 傍線④とあるが、そうした学生たちの様子から筆者が考えたり感じたりしたこととして正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア カリキュラム通りにしっかりと勉強させることが大学の役割であることを改めて痛感している。
- イ コンテンツをインストールすることができない大学に対して、学生の不満が噴出するのは当然であると嘆いている。
- ウ 友人との雑談やサークル活動ができないことに不満をぶつける学生たちを情けなく感じている。
- エ 勉強とは直接関係がない要素にこそ、大学の本質があることを示す事例であると考察している。

問六 傍線⑤とあるが、では筆者は大学はどのようなところだと述べているか。そのことを明確に述べた部分を含む一文を探し、初めの五字を答えなさい。

問七 空欄4に入れるのに適切な言葉を文中から九字で抜き出しなさい。

問八 傍線⑥の空欄に漢字を一字ずつ入れて、四字熟語を完成させなさい。

問九 傍線⑦の空欄に入れる四字熟語として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 試行錯誤 イ 付和雷同 ウ 因果応報 エ 心機一転

【問十・問十一は5科目型・英語型の受験生のみ解答すること。】

問十 傍線⑧とあるが、それはどのようなことで、それを踏まえ、問題を解決する際に私たちはどうしなければならぬと筆者は考えているか。

【1】 内の文章を要約する形で、八〇字以上百字以内で説明しなさい。ただし、「難局」「道筋」「知性」の三語を必ず用いること。

問十一 傍線ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

国語
解答用紙

※印らんには何も記入しないこと。

受験番号
氏 名

評 点
※

問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
					②		1
					③		2
							3

[illegible]